

[B年] 公現後第1主日(2022年1月9日)

【旧約聖書日課】 出エジプト記14章15～22節

¹⁵主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かつて叫ぶのか。イスラエルの人々に命じて出発させなさい。¹⁶杖を高く上げ、手を海に向かつて差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。¹⁷しかし、わたしはエジプト人の心をかたくなにするから、彼らはお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラオとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。¹⁸わたしがファラオとその戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」¹⁹イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使いは、移動して彼らの後ろを行き、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに立ち、²⁰エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ちこめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。²¹モーセが手を海に向かつて差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をもって海を押し返されたので、海は乾いた地になり、水は分かれた。²²イスラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のようになった。

【使徒書日課】 ヨハネの手紙一5章6～9節

⁶この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。⁷証しするのは三者で、⁸“霊”と水と血です。この三者は一致しています。⁹わたしたちが人の証しを受け入れるのであれば、神の証しは更にまさっています。神が御子についてなされた証し、これが神の証しだからです。

【福音書日課】 マルコによる福音書1章9～11節

⁹そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。¹⁰水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。¹¹すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記14章15～22節

¹⁵主はモーセに言われた。「なぜ私に向かって叫ぶのか。イスラエルの人々に出発するよ
うに告げなさい。¹⁶あなたは自分の杖を上げ、
海に向かって手を伸ばし、海を二つに分けな
さい。そうすれば、イスラエルの人々は海の中
の乾いた所を進んで行ける。¹⁷私がエジ
プト人の心をかたくなにするので、彼らはその
後を追って入って来る。そこで、ファラオと
その全軍、戦車と騎兵によって私が栄光を現
そう。¹⁸ファラオとその戦車、騎兵によって私
が栄光を現すとき、エジプト人は私が主であ
ることを知るようになる。」

¹⁹イスラエルの陣営の前を進んでいた神の
使いは移動し、彼らの後ろから進んだ。そこ
で、雲の柱は彼らの前から移動して、彼らの
後ろに立ち、²⁰エジプトの軍とイスラエルの
軍との間に入った。雲と闇があつて夜を照ら
したので、両軍が接近することはなかった。

²¹モーセが海に向かって手を伸ばすと、主は
夜通し強い東風で海を退かせ、乾いた地にし
た。水が分かれたので、²²イスラエルの人々は
海の中の乾いた所を進んで行った。水は彼ら
のために右と左で壁となった。

ヨハネの手紙一5章6～9節

⁶この方は、水と血を通して来られた方、イ
エス・キリストです。水だけではなく、水と
血とによって来られたのです。そして、霊は
このことを証しする方です。霊は真理だから
です。⁷証しするのは三者で、⁸霊と水と血です。
この三者の証しは一致しています〔別訳→こ
の三者は一つです〕。⁹私たちが人の証しを受
け入れるのであれば、神の証しはなおのこと
です。神が御子についてなされた証し、これ
が神の証しだからです。

マルコによる福音書1章9～11節

⁹その頃、イエスはガリラヤのナザレから来
て、ヨルダン川でヨハネから洗礼〔バプテスマ〕
を受けられた。¹⁰そしてすぐ、水から上が
っているとき、天が裂けて、霊が鳩のよう
にご自分の中へ〔異本→上に〕降って来るのを
御覧になった。¹¹すると、「あなたは私の愛す
る子、私の心に適う者〔直訳→私はあなたを
喜ぶ〕」という声が、天から聞こえた。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・1月9日「公現後第1主日」の日課主題は「イエスの洗礼」。「公現日(エピファニー)」(1月6日)に「東方の学者の来訪」を記念する西方教会の伝統では、「公現」後の主日に「主の洗礼」を記念してきた。一方、東方教会の伝統では、「公現日」に「主の洗礼」を記念する。教団聖書日課表では、概ね西方教会の伝統に従って「公現後第1主日」に「主の洗礼」を記念するように定められている。ただし、現代の西方教会主流教会の聖書日課表では、「公現日」に「公現の記念をする代わりに、「公現」の記念を前後の主日に移動して「公現の主日」とし、翌主日を「洗礼の主日」と設定するようになっている。

・福音書日課は、「マルコ福音書」から、主イエスの洗礼を伝える箇所。これに関連して、旧約日課は、「出エジプト記」から、モーセによりエジプトを出た人々がエジプト軍の追走を背に海を渡る奇跡を体験したとする逸話物語の中からの一部。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、「洗礼」の意味を示唆すると解されてきた箇所。

旧約日課(出エジプト14章より)

・「出エジプト記」は、ヘブライ語正典「律法」の第二巻で、「モーセの出エジプト物語」を伝える四巻(「出エジプト記」～「申命記」)中の第一巻。「モーセの誕生物語」から始まって、「モーセの召命物語」を経て、「エジプトから導き出した人々をシナイ山での契約へと導きイスラエルの民とする」までが物語られる。日課箇所は、隷属状態にあった人々が「初子の災いからの過越」事件を経てエジプトを離れた後、追走するエジプト軍を振り切るまでの出来事を描く一連の物語のクライマックス部分で、眼前に立ちはだかる海が割れて人々が向こう岸に渡って行くようにされる箇所。

・この物語で場面設定されている「海」は、前後の文脈(13:18、15:22など)から「葦の海(ヤム・スーフ)」のことである。「ヤム・スーフ」は、古くから「紅海」と誤訳されてきたが、ヘブライ語「スーフ」は古代エジプト語で「パピルス(葦)」を意味する「トゥーフ」からの転用と解されるようになり、現代では「葦の海」と訳されている。ナイル川下流域には葦原の広がる干潟が形成されており、そこが「葦の海」と呼ばれていると考えられている。なお、英語では「紅海」が「Red Sea」、「葦の海」が「Reed Sea」となるが、「紅海」の誤訳は紀元前の「七十人訳ギリシア語聖書」に遡り、英訳上の混乱ではない。

・「出エジプト物語」の「渡海」を「洗礼」の予表として解する教会の伝統は、初代教会まで遡ると推認され、パウロ書簡にも示唆する記述がある(1コリ 10:1~2)。これが、当時のユダヤ教で実践されていた異邦人の入信儀礼としての「清め」のラビ的解釈と共通のものであるかどうかは、分からない。

使徒書日課(1ヨハネ5章より)

・「ヨハネの手紙一」は、いわゆる「ヨハネ文書」の一つで、「ヨハネ福音書」や「手紙二」「手紙三」と同一の著者(グループ)によって、彼ら自身の教会共同体(「ヨハネの教会」)における共同体分裂騒動に際して一致を促す目的で著されたと推認される書簡。「原ヨハネ福音書」(最初に著された福音書初稿で、現行福音書の一部を欠くものと推定)が著された後、それによって生じた誤解を修正する意図で「手紙一」が著され、さらにこの修正方針に基づいて「原福音書」が改訂され現行福音書が完成したと考えられている。

・日課箇所は、本書簡の終結部の一部。本書簡の本論部分で繰り返されてきたのは、分裂騒動の中にある教会共同体が「初めからの教え」である「互いに愛し合うこと」に立ち帰り一致を回復するようということを実践的な教えとして示すことであるが、終結部では、イエス・キリストに対する信仰の神学的典拠が示される。日課箇所では、三つのキーワード、「水」と「血」と「霊」が取り上げられ、これによって端的にイエス・キリストの神学的位置づけが示されているが、各キーワードは既に一定の共通理解を有しているものとして扱われている。「水」と「血」の組み合わせは、「ヨハネ福音書」の描く主イエスの十字架死の場面にも示唆的に現れる(ヨハネ 19:34)。

・「水」は洗礼を意味し、「血」は主イエスの十字架死を意味すると解される。教会共同体の分裂騒動の中で、洗礼によるキリストとの一体化のみを強調し、十字架死の意義を軽んじる者たちが、著者に対立するグループとなっていたと推認される。「血」の強調は「ヨハネ福音書」6章にもあり、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり…」(ヨハネ 6:56)等の記述が、「洗礼」と対を成す「聖餐」に関する教えであることは明らかであることから、日課箇所の一連の教えは、信仰者がどのようなキリストと一体化されているのかという理解に基づいて教会共同体の一致回復の根拠としようとしていると考えられる。

福音書日課(マルコ1章より)

・日課箇所は、洗礼者ヨハネの紹介に続いて主イエスの洗礼の出来事が描かれる箇所。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で並行する逸話物語。

・この逸話は、福音書の物語構成上、主イエスご自身の証言に基づいたものとして描かれている(10節)。主イエスに洗礼を受けたヨハネを紹介する記事でヨハネの証言を取り上げているにもかかわらず、実際に主イエスの洗礼の出来事で起こったこと(聖霊の降臨など)について授洗者のヨハネが何らかの証言をしたことを示唆する叙述はどこにも見られない。すると、ヨハネが自分より後から来る方が「聖霊で洗礼をお授けになる」と言っ、自分の授けていた洗礼と区別する証言をしているのは、主イエス自身が「洗礼による聖霊

降臨」を自己証言されるようになった後に、それを承認する意図で為された証言なのかもしれない。

・洗礼に伴って起こったとされる聖霊降臨は、続く天からの宣言(11 節「あなたは私の愛する子、わたしの心に適う者」と一つの出来事として描かれている。この宣言句は、「主イエスの山上での変貌」の逸話物語で描かれる天からの声(9:7「これはわたしの愛する子。これに聞け」)の伏線となっている。この構成には、主イエスが弟子たちに語られたであろうご自身の洗礼体験とその意義(聖霊降臨、神の子宣言)についての教えを踏まえて、弟子たちがそれをどのように理解することになったのかという解釈過程が組み込まれていると考えられる。さらに、これを踏まえて、共観福音書は、受難の出来事に入って行く前の主イエスと弟子たちとの対話の中で、「このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」(マルコ 10:38)という言葉を示して、主イエスと同じ洗礼を弟子たちが受けるという初代教会の洗礼理解までを組み込んだ構成を展開させている。

来週の誕生日 (1月9日～15日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-202 番「よろこびとさかえに満つ」(= I 53 番「さかえあるいこいの日よ」)は、11-12 世紀フランスの神学者ペトルス・アベラルドゥス(ピエール・アベラル)の作詞。彼は、若いころに恋仲であったエロイーズが院長を務める修道院の晩課 *Vespers* のために書き、自身の讚美歌集に収めた。原曲は 17 世紀フランスの歌集に収められた教会旋法の曲で、19 世紀に英国教会の音楽家ヘルモアによって現行の旋律に改められ、広く歌われるように。
- ・21-544 番「イエスさまが教会を」は、『讚美歌第二編』編纂に際して公募入選した讚美歌。歌詞は、日キ鎌倉栄光教会信徒の石田直矣が家庭礼拝のための歌として作詞。曲は、阿佐ヶ谷教会信徒・小山彰三。
- ・21-277 番「罪なき神の子」は、20 世紀英国教会の司祭で聖歌集編纂にも携わったティムズの作詞。彼は、バプテスト信徒として育ったが、17 歳で国教徒に転じて司祭となった。イエスの洗礼物語を歌う讚美歌は希少で、公現日、主の洗礼主日などの教会暦のほか、洗礼式・堅信式などで歌われてきた。曲は、17 世紀の聖歌集に収録されたフランス教会旋律の編曲で、英語聖歌集(1975 年版)でティムズの詞と組み合わせられ、歌われてきた。
- ・21-180 番「去らせたまえ」は、前回資料(211229)を参照。

21-202「よろこびとさかえに満つ」

O quanta qualia

1. O quanta, qualia sunt illa sabbata / quae semper celebrat superna curia. / quae fessis requies, quae merces fortibus, / cum erit omnia Deus in omnibus.
2. vere Ierusalem est illa civitas, / cuius pax iugis est, summa iucunditas, / ubi non praevenit rem desiderium, / nec desiderio minus est praemium.

3. quis rex, quae curia, quale palatium, / quae pax, quae requies, quod illud gaudium, / huius participes exponant gloriam, / si quantum sentiunt, possint exprimere.
4. nostrum est interim mentem erigere / et totis patriam votis appetere, / et ad Ierusalem a Babylonia / post longa regredi tandem exilia.
5. illic molestiis finitis omnibus / securi cantica Sion cantabimus, / et iuges gratias de donis gratiae / beata referet plebs tibi, Domine.
6. illic ex sabbato succedet sabbatum, / perpes laetitia sabbatizantium, / nec ineffabiles cessabunt iubilii, / quos decantabimus et nos et angeli.
7. perenni Domino perpes sit gloria, / ex quo sunt, per quem sunt, in quo sunt omnia; / ex quo sunt, Pater est; per quem sunt, Filius; / in quo sunt, Patris et Filii Spiritus.

English translation

1. Blessing and honor and glory and power, / wisdom and riches and strength evermore, / be to the Lamb who our battle has won, / whose are the kingdom, the crown, and the throne.
2. Let all the heavens sound forth Jesus' name; / let all the earth sing his glory and fame. / Ocean and mountain, stream, forest, and flower / echo these praises and tell of God's power.
3. Ever ascending the song and the joy, / ever descending the love from on high; / blessing and honor and glory and praise: / this is the theme of the hymns that we raise.
4. Give we the glory and praise to the Lamb; / take we the robe and the harp and the palm; / sing we the song of the Lamb that was slain, / dying in weakness but rising to reign.

21-277「罪なき神の子」

The sinless one to Jordan came

1. The sinless one to Jordan came / To share our fallen nature's blame; / God's righteousness he thus fulfilled / And chose the path his Father willed.
2. Uprising from the waters there, / The voice from heaven did witness bear / That he, the Son of God, had come / To lead his scattered people home.
3. Above him see the heavenly Dove, / The sign of God the Father's love, / Now by the Holy Spirit shed / Upon the Son's anointed head.
4. How blest that mission then begun / To heal and save a race undone; / Straight to the wilderness he goes / To wrestle with his people's foes.
5. Dear Lord, let those baptized from sin / Go forth with you, a world to win, / And send the Holy Spirit's power / To shield them in temptation's hour.
6. On you shall all your people feed / And know you are the Bread indeed, / Who gives eternal life to those / That with you died, and with you rose.

21-180 番「去らせたまえ」

Nunc Dimittis

Nunc dimittis servum tuum, / Domine, secundum verbum tuum in pace: / Quia viderunt oculi mei salutare tuum / Quod parasti ante faciem omnium populorum: / Lumen ad revelationem gentium, et gloriam plebis tuae Israel.